今週の
倫理

2024. 8. 10〜8. 16

8月のテーマ　|　運命自招

1398号

運命は自ら招くと覚悟した時 未来は切り開かれる

予期せぬ出来事や思うようにならない事態に遭遇した時、落胆することがあります。そのような時、どのように考え、行動するかで、その後の人生を左右します。

平成二十三年三月十一日に東日本大震災が発生しました。宮城県で蒲鉾屋を経営するO氏は、津波によって会社や自宅など全てを失いました。

それから二日後、息子と瓦礫が広がる町を見ながら、〈町を再建しよう〉と決心します。そして、「地元の商人が力を合わせ、皆を元気づける市（いち）から始めよう」と復興市を企画したのです。幸福を呼ぶ市との願いを込めて「福興市」と名付けました。しかし、テントも売る物もありません。すると、全国の商店街の仲間が手を差し伸べてくれたのです。当日は多くの支援者が集まり、大成功を収めました。

震災前、会社の売り上げは一億六千万円でしたが、津波によりお店や工場などが流され、損害額は二億円に達しました。二十名の社員を全員解雇せざるを得ず、再建はおろか、瓦礫の撤去さえいつ終わるのか見当がつきませんでした。

しかし、隣町に仮工場を開設しようと強い思いで行動に移すと、知り合いがO氏の窮状を知り、力を貸してくれることになりました。その知り合いの一人である不動産会社の方からは、「あんたが来るかもしれないという噂を聞いていたので、とっておきの場所を確保しておいたよ」と思いがけない言葉をもらいました。

翌年二月、O氏は初代組合長として、仮設の商店街をオープンさせました。すると、驚くほど多くの人々が訪れ、今では「奇跡の商店街」と呼ばれるまでになったのです。仮工場のおかげで、売り上げは一億円を突破。その後も売り上げを順調に伸ばし、以前の売り上げを超すまでになったのです。

その後、O氏は自宅を再建することができました。平成二十九年には、生産規模が以前使用していた工場の三倍となる、衛生管理の国際的な食品管理基準であるHACCP対応の新工場が完成しました。当初からHACCP対応の本社工場を建設し、息子に譲ろうと思っていたO氏は、それから数年後、息子に事業継承するのです。コロナ禍で厳しい状況下になりますが、新社長は、業界初の常温保存が可能な蒲鉾を発明し、この蒲鉾は一年間で三千万円もの売り上げを誇る大ヒット商品となり、コロナ禍の窮地を脱することができたのです。

「運」とは「めぐる」とも読むように、人生は常に変化し、自分の手で変えることができるものです。思い通りにならないからといって、「運」のせいにし、「仕方がない」と諦めてしまっては、未来は何も変わらないばかりか、暗い方向へと引きずられてしまいます。心構えとして大切なのは、「運命は自ら招くもの」と覚悟することです。今を大切に生きることで生まれる明朗な心を土台に、毅然と立ち向かう時、O氏のように支援者が現われ、運命を切り開くことができるのです。

え・城谷俊也

一般社団法人倫理研究所法人局